

3.11とアーティスト：10年目の想像



小森はるか+瀬尾夏美《二重のまち／交代地のうたを編む》2019
©Komori Haruka + Seo Natsumi

【展覧会概要】

展覧会名：3.11 とアーティスト：10年目の想像

会 期：2021年2月20日（土）～5月9日（日）

開場時間：10:00～18:00（入場は17:30まで）

会 場：水戸芸術館現代美術ギャラリー

出品作家：加茂昂、小森はるか+瀬尾夏美、佐竹真紀子、高嶺格、ニシコ、藤井光、Don't Follow the Wind

休 館 日：月曜日 ※ただし5月3日（月・祝）は開館

入 場 料：一般900円、団体（20名以上）700円

高校生以下・70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料

※学生証、年齢のわかる身分証明書が必要です

※年間有効フリーパス →「年間パス」2,000円は感染症の影響により現在販売を中止しています

◎学生とシニアのための特別割引デー「First Friday」

→ 学生証をお持ちの方と65歳～69歳の方は、毎月第一金曜日（3月5日、4月2日、5月7日）100円

主 催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

助 成：公益財団法人花王芸術・科学財団、公益財団法人野村財団、オランダ王国大使館、
モンドリアン財団、Stroom Den Haag

協 力：サントリーホールディングス株式会社

企 画：竹久 侑（水戸芸術館現代美術センター主任学芸員）

2021年3月、東日本大震災から10年目を迎えます。

当時自らも罹災し、臨時の避難所となった水戸芸術館では、2012年に展覧会「3.11とアーティスト：進行形の記録」を開催しました。同展では震災を受けてアーティストが行った様々な活動を、芸術であるか否かを問わず、時間軸に沿って紹介しました。大規模な災害を経験したばかりの頃、アートの意味や役割が問い直されるさなか、アーティストらがとった行動の大半は、支援と記録を主眼に置いたものでした。

あれから10年。アーティストたちは今や「作品」を通してあの巨災に応答しています。本展では「想像力の喚起」という芸術の本質に改めて着目し、東日本大震災がもはや「過去」となりつつある今、あの巨災と私たちをつなぎ直し、あのとき幼かった世代へ、10年目の私たちへ、そして後世へと語り継ごうとする作品群を紹介します。

なぜなら、東日本大震災が露わにした問題の一つは、私たちの「想像力の欠如」だったからです。ものごとを想像する／させることは、そもそも芸術の重要な仕事の一つではなかったでしょうか。

【展覧会のポイント】

○10年という時間を体感し、変化と不変を見つめる

原子力発電所の事故を受け、人々が巷で交わした会話を再現した映像作品を通し、10年前の私たちを思い起こします。また、被災地に通い続けたアーティストが、当地で見た風景や聴いた言葉を、絵やテキスト、映像などで表した作品を通して、10年間という年月の経過、そのなかにおける変化と不変を見つめます。既存作品のほか、本展に向けて制作された新作が発表されます。

○当事者と非当事者、画せない一線

東日本大震災をめぐる当事者と非当事者を画する一線が定まることはありません。アーティストたちは自ら当事者性を獲得してあの巨災にかかわり、ときにはあの災禍にまつわる小さな物語を遠くまで伝え、ときには人々を巻き込んで議論の場を設けてきました。それぞれの手法で照らし出された災厄のさまざまな現実に向き合うとき、私たちの当事者性が問われます。

○現代の小学生とともに「差別」について考えた新作を発表

藤井光は、3.11以降、東日本大震災の禍根をいかに表現し語り継ぐかを探求する過程で、福島の人たちの「心の問題」（いじめ、差別）に直面します。^{*1} 一方、本展の準備期間である2020年は、新型コロナウイルス感染症が私たちを不安に陥れました。放射性物質とウイルス——未知のもの／見えないものに対する「恐怖」が芽生えさせる根拠のない差別意識を、藤井は2020年に世界各地の人々が反対の声を挙げた黒人差別と重ね合わせます。かつて、キング牧師の暗殺事件を受けて白人の差別意識を嘆いたあるアメリカ人教師が行った1960年代の伝説の授業を、藤井はこのたび県内の教育者の協力を得て3.11後版に書き換え、日本の小学生とともに再演し、新作として発表します。^{*2}

^{*1} 朝日新聞社と福島大学による共同調査。福島県内外に避難した住民のうち共同調査に応じたことがある348名にアンケートを送付。福島県を含む19都府県の184名から回答があった。

<https://digital.asahi.com/articles/DA3S12815146.html>

^{*2} ジェーン・エリオット先生によってアメリカの小学校で1968年に行われた授業。ドキュメンタリー『A Class Divided』（青い目 茶色い目～教室は目の色で分けられた～）として1985年エミー賞受賞。

○鑑賞者から語り手へ—『10年目の手記』

災害といつも隣り合わせの国に住む私たちは、東日本大震災が残した傷痕をいかに自分事として捉え、また子どもたちに語り継げるでしょうか。もはや大震災が過去となりつつある今、展覧会を観た人が自ら語り手となって、手記やコメントを残す場を設けます。（次頁参照）

【連携事業】

■ 10年目の手記

東日本大震災にまつわる「忘れられない」「忘れたくない」「覚えていたい」出来事をつづった手記を募集し公開している『10年目の手記』。新たに手記を募り、本展会場にて公開します。

会場：現代美術ギャラリー第8室

協力：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

【関連プログラム】

■ 対話の電話

展覧会を観て来場者が思ったこと、感じたことについて、CAC ギャラリートーカーと電話ごしに対話する企画です。

日時：3月20日（土）・27日（土）、4月10日（土）・25日（日）、5月8日（土） 14:30～16:00

会場：現代美術ギャラリー第8室

参加費無料、予約不要 ※一人3～10分程度

■ きけんはっけん！ ぼうさいワークショップ

作品を観たあとに、災害時に焦らず行動ができるよう、イラストを見ながらみんなで話し合って答えを探そう。2019年水戸市で発生した水害で支援にあたった方をファシリテーターに招き、子ども向けに開発された防災教材を活用して小学生対象のワークショップを実施します。

日程：3月28日（日）

会場：現代美術ギャラリー内ワークショップ室

ファシリテーター：佐々木恵美子

参加費無料、要予約

※対象・定員・申込方法など詳細は、後日当館ホームページにてご案内します。

■ 防災イベント（仮）

展覧会のテーマである「想像力の喚起」を促すワークショップ型防災イベントを実施します。アウトドア防災ガイドによるレクチャーと緊急時に役立つ実践的なワークショップ、東日本大震災におけるアーティストの取り組みを振り返る3部構成です。子ども連れで家族でも参加できるよう、レクチャーの時間には子ども向け防災ワークショップを並行して実施します。

日程：4月29日（木・祝）

会場：広場 ※雨天時は内容を一部変更して会議場で実施

ファシリテーター：あんどうりす（アウトドア防災ガイド）、佐々木恵美子（教員 [子ども向け防災WS担当]）

参加費有料、要予約

※対象・定員・参加費・申込方法など詳細は、当館ホームページにてご案内します。

【注目情報】

◎ 3月11日は入場無料！

東日本大震災を振り返るために、3月11日はどなたでも展覧会を無料で鑑賞いただけます。

◎ First Friday

展覧会開催期間中の毎月第一金曜日は、学生と65～69歳の方々が、100円で展覧会を鑑賞いただけます。

※証明書をお持ちください

日程：3月5日（金）、4月2日（金）、5月7日（金）

◎ 鑑賞ガイド 3.11展覧会のしおり

展覧会を観るヒントをやさしい言葉でつづった『3.11展覧会のしおり』をつくり、会場にて無料で配布します。

※対象：小学生以上

◎ アワアワしないアワー

お子さま連れやケアが必要な方々が鑑賞しやすいよう、お手伝いするスタッフが見守る時間帯を設けます。

※予約不要

日時：3月20日（土）、4月20日（火）いずれも10:00～12:00

【作家略歴】

加茂昂（1982年東京都生まれ。埼玉県在住）

画家。東京藝術大学美術研究科絵画専攻修了。東日本大震災後より、「絵画」と「生き延びる」ことを同義にとらえ、様々な土地で出会った人や出来事、歴史に向き合い、社会や個人の事象や心象を絵画に描いている。近年は、広島の前原、水俣病、福島の原子力発電所事故といった日本が抱えてきた甚大な災禍を、作品テーマのひとつに据える。主な個展に「福岡町とその光景の肖像」（福岡町文化交流センター学びの森、2020）、「境界線を吹き抜ける風」（LOKO GALLERY、2019）、「追体験の光景」（原爆の図丸木美術館、2018）、「その光景の肖像」（つなぎ美術館、2017）等。

小森はるか+瀬尾夏美

映像作家の小森はるか（1989年静岡県生まれ、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了）と画家で作家の瀬尾夏美（1988年東京都生まれ、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了）によるアートユニット。東日本大震災を受けてボランティア活動で東北を訪れたことを機に活動を開始。2012年から3年間岩手県陸前高田市に暮らしながら制作に取り組む。2015年仙台に拠点を移し、土地と協働しながら記録をつくる組織、一般社団法人NOOKを設立。風景と人々の言葉の記録をテーマに制作を続け、対話の場としての展覧会やワークショップの企画と運営も行っている。

佐竹真紀子（1991年宮城県生まれ。同県在住）

美術家。武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。東日本大震災を受け、津波の被害を受けた仙台市の沿岸地域に市営バス停留所を模したオブジェを設置する《偽バス停》シリーズ（2015-2018）を制作。沿岸部の人々との交流を経て、2017年からは再び絵画制作に着手。「VOCA展 2017 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」（上野の森美術館）に出品。主な個展に「波残りの辿り」（東北リサーチとアートセンター [TRAC]、2020）。一般社団法人NOOK理事。

高嶺格（1968年鹿児島県生まれ。東京都在住）

美術家・演出家。京都市立芸術大学工芸科漆工専攻卒業、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー [IAMAS] 修了。1990年代には「ダムタイプ」のパフォーマーとして活動。福島の原子力発電所事故を受けた人々の会話を再現した「ジャパン・シンドローム」シリーズ（2011-2012）等、現代社会に潜む問題を自身の個人的体験や身体的感覚に引きつけて、パフォーマンス、映像、インスタレーション等様々な媒体で浮かび上がらせる。第50回ヴェネチア・ビエンナーレ出品（2003）。主な個展に「高嶺格：とくよくみえない」（横浜美術館ほか2ヶ所、2011）、「高嶺格のクールジャパン」（水戸芸術館現代美術ギャラリー、2012-13）。

ニシコ（1981年鹿児島県生まれ。ハーグ [オランダ] 在住）

美術家。東京造形大学デザイン学科視覚伝達専攻写真コース卒業、ハーグ王立芸術アカデミーファインアート科卒業。自らが体験あるいは遭遇した負の出来事や既成概念、わずかに常軌を逸する事柄を記録する活動を行っている。特定の主題の、一般的な見られ方や扱われ方とは正反対の側面に着目して魅力的な特徴を示すことで、ありふれた生活の価値を掘り起こすことを試みる。彫刻、インスタレーション、書籍、アクション、音、ウェブサイトなど広範な手法を用いる。主な個展に「Repairing Earthquake Project」（Stroom Den Haag、2018）など。2017年ローマ賞候補。

藤井光（1976年東京都生まれ。同地在住）

美術家・映画監督。パリ第8大学美学・芸術第三博士課程 DEA 卒業。様々な国や地域の文化や歴史を検証し、現在の社会課題に応答する作品を制作。各分野の専門家との領域横断的かつ芸術的協働をもたらすワークショップを企画し、参加者とともに歴史的事象を再演するなど活発な議論の場を作り出すことで、過去と現代を創造的につなぎ、歴史や社会の不可視な領域を構造的に批評する。主な展覧会に「もつれるものたち」（東京都現代美術館、2020）、あいちトリエンナーレ 2019 など。NISSAN ART AWARD 2017 グランプリ、Tokyo Contemporary Art Award 2020-2022 受賞。

Don't Follow the Wind

Don't Follow the Wind は、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって生じた帰還困難区域内で2015年から行われているプロジェクトの名称。12組のアーティストによる作品が一般の立ち入りが制限されている複数の会場に展示されているため、区域内の封鎖が解かれるまで、見に行くことの出来ない展覧会である。発案者は Chim ↑ Pom、キュレーターは窪田研二、エヴァ&フランコ・マッテス、ジェイソン・ウェイト。参加アーティストは、艾未未、グランギニョル未来、小泉明郎、タリン・サイモン、竹内公太、竹川宣彰、Chim ↑ Pom、ニコラス・ハーシュ&ホルヘ・オテロ=パイロス、トレヴァー・パグレン、エヴァ&フランコ・マッテス、宮永愛子、アーメット・ユーグ。

【図 版】 展覧会広報用にデータを貸し出しますので、ご要望の方は鳥居までお問合せください。

1



2



3



4



5



6



7



1.加茂昂《福島県双葉郡浪江町北井出付近にたたずむ》2019 撮影：加藤健

2.小森はるか+瀬尾夏美《二重のまち／交代地のうたを編む》2019 ©Komori Haruka + Seo Natsumi

3.佐竹真紀子《日和山の再会》2020

4.高嶺格《ジャパン・シンドローム水戸編》2012

5.ニシコ《地震を直すプロジェクト第7段階（メッセージ）オブジェクト#2012_3（取り皿）》2020 撮影：ニコラ・コーカルディ

6.藤井光 タイトル未定 2020-2021

7.グランギニョル未来《グランギニョル未来2020》からの画像キャプチャ 2020 Courtesy of Don't Follow the Wind

プレス向け内覧会のお知らせ

2021年2月19日(金) 14:00～15:30 受付開始 13:30

場所：水戸芸術館現代美術ギャラリー

出席者：出品作家

竹久 侑（水戸芸術館現代美術センター主任学芸員）

※感染症の状況により、プレス向け内覧会の実施を見合わせる場合がございます。

※人数把握のため、ご参加を希望される場合は必ず事前にお申し込みいただきますようお願い申し上げます。また、ご来館にあたっては事前に当館HP「新型コロナウイルス感染症予防のお願い」を必ずご確認ください。

【お問合せ】

水戸芸術館現代美術センター

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8120/Fax.029-227-8130 <https://www.arttowermito.or.jp/>

展覧会について：竹久侑（主任学芸員）

教育プログラムについて：森山純子、佐藤麻衣子（教育プログラムコーディネーター）

広報・写真貸出について：鳥居加織（広報） e-mail:cacpr@arttowermito.or.jp

*詳細は公式ツイッター http://twitter.com/MITOGEI_Gallery でも配信いたします。

【記事掲載についてのお願い】

- 1) 掲載にあたっては、正式展覧会名称と会期の表記をおこなってください。
- 2) 写真を掲載する場合は、写真に添付してあるキャプション・クレジット等を正確に表記してください。
- 3) 誌面掲載する電話番号は、水戸芸術館代表番号029-227-8111でお願いいたします。
- 4) 掲載記事とVTRは、資料として保管いたしますので水戸芸術館現代美術センター鳥居までご送付ください。
- 5) 取材及び収録等の取材は、必ず事前にお問い合わせください。都合により取材に応じることのできない場合がございます。

【交通のご案内】

[JR] 東京駅（品川、上野発もあり）から常磐線特急で約72分～84分、水戸駅下車。駅北口バスターミナル4～7番のりばから「泉町一丁目」下車。降車後バスの進行方向に進み、すぐの交差点で大通り（国道50号）を渡り、そのまま真直ぐにお進みください。徒歩2分。

◎料金：特急片道3,890円／普通各停片道2,310円（2020年12月現在）

※ご予約・時刻表など詳しくはこちらをご参照ください。JR東日本旅客鉄道 Tel.029-221-2836

<http://www.jreast.co.jp/>

[高速バス] 東京駅八重洲南口バスターミナルのりばから高速バス「みと号」（赤塚又は茨大ルート）で約100分、「泉町一丁目」下車、徒歩2分。切符は東京駅八重洲南口バス券売機、水戸駅北口バスチケット売場でお求めください。

◎料金：東京駅－水戸駅片道切符2,120円。ツインチケット（2枚綴り回数乗車券4,000円）。（2020年12月現在）

※詳しくはこちらをご参照ください。茨城交通 Tel.029-251-2331 <http://www.ibako.co.jp/>

[お車] 常磐自動車道水戸ICから国道50号に下りて市街地方面にお進みください。約20分、国道349号との交差点「南町3丁目」（左手にみずほ銀行）で左折、2つ目の信号でまた左折してください。

そこから1つ目の信号を過ぎたところで水戸芸術館地下の市営五軒町駐車場のマークが見えてまいります。

◎駐車場料金：30分まで無料、1時間まで200円、以降30分毎100円／営業時間：7:00～23:00

※高速料金・ルートなど詳しくはこちらをご参照ください。

東日本高速道路「ドラぷら」 Tel.0570-024-024 <http://www.driveplaza.com/>